



愛欲と 被虐の調教

早瀬響子 著
イラスト 羽田共見

愛欲と被虐の調教

《立読み版》

早瀬 響子

イラスト 羽田 共見

「やっ、あ……」

かみむらゆきひと

上村幸人は、思わず声を上げ、それから慌ててかろうじて自由になる片手で口を塞いだ。背後から幸人の身体を拘束している男が耳元で囁きかける。

「声を出しても良いんだぞ」

「……!!」

しんじょうきょう

どこかあざ笑うかのような声で男——新城京吾はその言葉と同時に、直に掴んだ幸人の牡莖を、ゆっくりと揉みしだくように指を動かした。もう一方の筋肉に覆われた強靱な腕は、幸人のほっそりとした身体を締め付けたままだ。無理矢理高められ、過敏になった身体にさらに、じん、と強い刺激がこみ上げてくる。幸人はびくりと身を引きつらせた。悲鳴が漏れそうになるのを、懸命に耐える。

絶対に声を出してはいけない。薄いカーテンを隔てただけの同じ病室で、義母が——ずっと母親代わりで自分を育ててくれた伯母が眠っているのだから。彼女は最近、やっと身体に合う薬が見つかって、

久しぶりにぐっすりと眠れているのだから。

「……っ！ ……う……」

だがそれは、幸人に地獄の苦しみをもたらした。何故ならその身体は、ついさっき、秘孔の内部に手荒く塗り込まれた催淫剤のために、すでにぎりぎりまで追いつめられていたからだ。これまで二十年間生きてきて、こんな感覚は生まれて初めてだった。身体の奥深くに火がついて、それが内部から身体を焼き、責め立てているようだ。

その感覚を必死にこらえ、思わず強くかぶりを振った幸人は、次の瞬間息を吞んだ。目の前の窓ガラスに、映る自分の姿が飛び込んできたのだ。

この病院は都心から離れた、最寄り駅からも少し遠い小高い丘にある。まだ寒さの続く二月の半ば、外はもうすっかり暮れているので、ネオンの街並みを見下ろせる暗い背景に、ぼうっと浮き上がるように、幸人の姿が映し出されている。

ほっそりと白い、すんなりとした幸人の身体に、背後から端整な顔立ちと、長身で細身だが強靱な体つきの男が羽交い締めにし、のしかかっている。京吾の両手が幸人を押さえ込み、うなじに歯を立てる。まるで全てを、支配しようとするかのように。

幸人は全体的に色素が薄い。茶色の髪に肌も白く、顔は卵形で小さい。その中で大きな二重の瞳がくつきりと目立っていて、鼻筋は通っているが細く、唇は小さく赤く、義母や実の母に似た容貌なのだ。義兄に子どもの頃からしよっちゆう『女みたいだ』とからかわれ、コンプレックスを持っているその顔は、今、羞恥に染まっていた。あられもない姿にされていたからだ。

きちんと身につけていたはずのリクルートスーツやネクタイ、そしてその下のシャツは全てはだけられ、ずり降ろされて両肩が剥き出しにされている。白く滑らかな肌を露わにされ、二つの乳首までが見えている。だがもつと酷い有様なのは下半身だった。ズボンのベルトが外され、金具が緩められ、さら下着までが引き下ろされ、言い訳のしようのないほどに淫らな格好である。

そして、牡茎が剥き出しにされていた。既に赤く熟れた牡茎は、文字通り京吾の手中にあり、彼に完全に翻弄されていた。彼が手を動かすごとに、牡茎はまるで弾けるように反応し、先端から淫らな液体を止めどなく溢れさせている。

「じつとしている。お前はもう、俺に逆らうことは絶対に出来ないのだから。恨むなら、お前の兄貴を恨め」

また耳元で囁かれ、幸人は震え、再び小さくかぶりを振った。そんな自身の淫らな姿をこんなにもさ

らけ出しているというのに、まだ目の前のことが現実だとは思えなかった。まるで、悪夢のようだった。それもずっと見続けていてしかも先に進めば進むほど悪くなっていくような夢だ。

「——えっ。義兄にいさんの会社が、倒産……!?!」

ほんの一週間前、その知らせがもたらされた時から、その悪夢が始まったと思う。幸人が義母には内緒で、大学を辞める手続きをしようとした家を出ようとしたまさにその時、電話が鳴ってその事実を知らされたのだ。

けれど倒産に関しては、もしかやそうなるのではないか、と幸人は以前から密かに危ぶんでいた。むしろ、二年も保ったことが意外だったほどだ。

幸人の実の両親は、彼が五歳の時、事故で亡くなっている。そんな幸人を養子として引き取ってくれたのが父方の伯父夫婦だった。二人の間には幸人より五歳年上の実子、浩ひろしがいたが、分け隔てのない情愛で幸人も可愛がってくれた。幸人にとって伯父夫妻は、実の両親以上に有り難く、大切な、大好きな人たちだった。

けれど幸人が高校生の時、その伯父である義父が急死した。義父は生前、腕の良い設計士で、個人で建築設計の会社を経営していた。それを、大学を卒業し、建築士の資格を取ったばかりの義兄の浩が、

かなりな無理を言って引き継いだのだった。そしてそれからわずか二年足らずの間に、会社の経営状態は悪化の一途をたどっていた。経営に関しては素人だった幸人が見ても、それは危険だとわかる程だった。義母も幸人も、浩に何度も意見したが、彼は聞こうとしなかったのだ。

幸人も設計士になりたかったので、その勉強を続ける傍らでさらに経営も学び、何とか義兄にわかってもらおうと努力したのだが、義兄は態度を変えず、八つ当たりでかえって幸人や、義母に手を上げる有様だった。幸人は自分はともかく、義母が殴られるのはとにかくいやだったので、次第に義兄に逆らわないようになっていた。そして心労のあまり義母が倒れ、ガンだと診断された。幸人はとにかくこれ以上、義母に負担と心配をかけるわけにはいかないと考え、大学を辞めて働こうと今年の四月からの職を見つけた。その矢先の倒産だった。

——けれど幸人は、倒産は予想していたが、それと同時に義兄が行方をくらますとまでは思っていなかった。義兄とは当日まで連絡が取れていたし、まさかいくらなんでも病気の義母を——義兄にとっては実の母を、見捨てる筈はないと思っていたのだ。

だが、倒産の知らせが入った直後、義兄とは連絡が取れなくなってしまい、行方もわからなくなった。そして、義兄は億単位の負債を抱えていたので、その取り立てが全て義母と幸人の元に来てしまったの

だ。当然、病身の義母にそんな相手への対応はさせられず、幸人が全て交渉する羽目になった。会社の顧問弁護士に間に入ってもらい、ともかく貸借状態を把握して整理しようとしたのだが、義兄は行方がわからなくなる直前には随分追いつめられていたらしく、借金していた相手にはかなりいかかわしい、やくざまがいの者たちもいて、そんな連中が直に幸人のもとに押し掛けてくることもあった。だからこの一週間、幸人は落ち着く暇どころか、生きた心地さえしなかったのだ。むろん義兄とは全く連絡が取れない。

——そんな日々が続く中、今日の夕暮れ、幸人はようやく時間を見つけて義母の見舞いに行ったのだが、病院の近くまで来た時、いきなり取り立て屋達に捕まってしまったのだった。

「あ、あの、お願いです。どうか少しだけ待ってください。義母を見舞ったら、すぐに戻りますから…」

懸命にそう言った幸人を取り囲み、男たちはせせら笑うように答えた。

「何を言ってるやがるんだ、そんな悠長なことをやっていられるか。お前のクソ兄貴が残した借金が、どれくらいあると思ってる？」

「とにかくちょっと来てもらおうか。その兄貴のおかげで、お前に興味を持つ方も、結構いてな」

「えっ……？」

言いながら、男の一人が自分の顎を掴み、顔を上げさせたので幸人は目を見張った。一体どういふことなのだろう。

だが呆然としている間に、幸人は男たちに取り巻かれ、そのまま向こうに停車したワゴン車に連れ込まれそうになった。

「やっ、やめてっ、誰か……!!」

拉致されるのかとようやく察した幸人は、懸命に叫んだ。けれど、数人で押さえつけられ、腕をねじり上げられて全く抵抗できなくなった。義母の入院している病院は、前述したように都心から少し離れた郊外の、丘の中腹にある。周囲には民家も店もない。だからこの時間帯になると、ついさつき、幸人も利用したバスが停車する時以外は、人はおろか車も殆ど通らなくなるのだ。男たちは明らかにそれを見越しているようだった。

——駄目だ、ここでおれがそんなことになったら、義母かあさんを誰が守るんだ……!!——

その時、微かなエンジン音が聞こえ、幸人ははっとした。車が丘を登ってくる。それもかなりなスピードを上げて、こちらにぐんぐん近づいてくるのがわかる。

「あ、こいつ！」

幸人はとっさに渾身の力を振り絞り、車道に飛び出した。

「助けてっ……っ！」

その声と同時に上り坂のカーブを曲がって姿を現したのは、手入れの行き届いた一台の黒いBMWだった。そして運転者は、明らかに幸人をすぐに認めたようで、その手前でピタリと停車したのだ。まるで、当初から幸人を探していたかのようなだった。

「!? ……助けて下さいっ！」

幸人は驚いたが、とにかく再び叫んで、助けを求めようとした。男たちは動揺した様子でその腕を手荒く掴み、押さえつける。と、停まった車から、長身の男が一人、降り立った。

「やっばりな、思った通りか」

彼は、男たちの手で地面に膝をつかされた幸人を見おろし、冷ややかに言った。

「え……」

すらりとした、やや細身だが強靱で俊敏そうな体つきの男だった。まだ若い。二十代半ば——ちょうど義兄の浩と同じ年くらいだろうか。

短く整えられた髪も、瞳も漆黒である。肌の色が白いので、一層それが際だっている。やや顎の尖った輪郭に、高い鼻梁。形の良い薄い唇。

ごく整った、端正な顔立ちだが、特に人目を引くのはその瞳だった。くっきりと切れ込んだ二重なのに、切れ長な形が鋭角的な印象を与える。そしてその上に、まるで描いたような眉。端正な美貌だが、柔弱な印象は全くなく、顔全体に研ぎ上げられたような鋭さが漂っていた。

身に纏っているのは、一目見ただけでわかる、ごく仕立ての良い濃紺のスーツと、ブルーのシャツ。その上からやはり仕立てのいい、細身で砂色のコートが無造作に着ている。それがまた、端正な姿をさらに引き立てている。

幸人は再び、目を見張り、何度も瞬きをした。その男の外見自体にも引きつけられていたが、その顔に見覚えがあったからだ。

「——新城、さん……?」

義兄が、何度か彼と一緒にいるのを見た覚えがある。それに一度だけ、彼が自宅に来た時に言葉を交わしたこともあった。だが、何故彼がここにいるのか、幸人にはわからなかった。

「覚えていたのか。それなら話は早い」

男——京吾は唇だけで笑うと、男たちを見やった。

「失せろ」

「何っ……」

複数の男たちは、既に完全に氣迫負けしていた。それでもリーダー格らしい、幸人の腕を掴んでいた男が威嚇する。

「いい度胸じゃないか。てめえ、格好つけてやがるのか？」

さすがに、脅す行為に慣れたような響きの声だった。だが京吾はあつさり応じた。

「いい度胸はお前らだ。こんな真つ昼間から人間一人を拉致するわけか？　これはかなりまずい行為じゃないか。下手をすると誘拐罪だぞ。借金よりそっちの方が、遙かに罪が重い。未遂でも、だ」

「……!!」

とたん、男たちはさらに動揺した様子になった。

「う、うるせえっ!!」

その淡々とした声に、逆にカッとなったらしく、別の男がいきなり殴りかかってきた。とたん京吾は軽くその腕を掴み、ひょいと自分の身体に押しつけるようにして、逆にねじり上げてしまった。男が悲

鳴を上げた。

「ギヤツ！」

「……で、やばくなったら暴力か。つくづく大したことのない連中だ」

幸人は息を呑んだ。京吾はそれ程力を入れておらず、その端正な顔を歪めてもいない様子なのに、彼よりも屈強そうな男が身動きできないでいる。

「さあ、そいつを置いてとっとと失せろ。これ以上まずいことになる前にな」

そのままの姿勢で、顎をしゃくり、平然と京吾はそう告げた。そして、腕をねじり上げた男をリーダーに向けて突き飛ばす。リーダーは蒼白になり、無言で他の連中に目配せした。とたん、全員があつという間に車に飛び乗って退散していった。

「あ、ありがとうございます、新城さん。でも、どうして……」

呆然としながらも顔を上げ、幸人は懸命にそう言った。助けてくれたことは感謝するが、何故、彼がこんなところに現れたのかわからない。その時、腕を京吾が掴んだ。さつき男たちに掴まれたのと同じところだ。

「まず、病院に行くぞ。それから少しばかりお前に話がある。義理の兄貴のことだな」

そう言つて幸人を無造作に引き起こすと、その顔をのぞき込み、唇を微かに歪めた。幸人はぎくりとした。それは、明らかに何かを含んでいる笑みだった。

「——あの、すみません、新城さん。お話つてなんでしょうか。ここで良かったらお話ししていただけますか」

それで、病院の駐車場に京吾が車を止めると、幸人は急いでそう聞いた。ともかく札を言い、改めて挨拶を交わして京吾の車に乗せてもらつてここまで来たが、途中で聞いた彼の言葉がどうにも気になつていた。むろん、彼の態度も。

「どうして急いで聞きたがる？」

だが、こちらを向いた京吾は悠然としていた。ゆったりしているはずのBMWの座席が、長身の彼が座つていると狭く見える。

「ええと……もし、義兄について教えていただけれるなら、何でも知りたいのです。もしかして、義兄がどこにいるのか、ご存じなのですか？ 義兄の借金のことで、おれがあの人達に拉致されるのを、予想されていたみたいだし……。それに、そのことを義母にもお話しするつもりなら、先におれが聞いておきたいと思つたんです。義母はすごく義兄のことを心配しているのですが、入院していますから……急

に聞いたら、体調を崩してしまうかもしれないと思って……。失礼なことを言って、本当に申し訳ないのですけれど」

急いでそう謝る。相手が不注意に義母を傷つけるかもしれないから、と暗に言っているようなものだからだ。だが、一人病室で不安を抱えながら、病と闘っている義母のことを思うと、どうにも心配でそう聞かざるを得なかった。

「ふん、親孝行なことだ。まあ、あらかじめ俺から話しておいた方がいいだろう」

京吾は何故か、微かに形の良い眉をひそめ、顔をしかめた。それから軽く肩を竦めた。

「残念だが、俺は兄貴の行方を知っているわけじゃない。ただ少々、彼に金を貸していてね」

「えっ……」

不意にその黒い瞳が、幸人を見据えた。その視線と言葉に、幸人はぎくりとした。

——そういえばこの人、学生時代から色々と事業をやっていたって義兄さんから聞いたことがあるけれど。確か、『奴とつき合っていると得だぜ』とか言っていたような……——

今はIT企業の他にも、不動産を扱ったり、経営コンサルタントなどもしているらしい。先ほどもらった名刺にもそんな肩書きが書き込まれていたし、着ているスーツも車も、その経営状態を表すかのよ

うに上質で、なおかつ彼はそれらを当然のように身につけ、使い慣れている様子だった。明らかに贅沢な暮らしが身につけている男である。

幸人がそんな風に思いを巡らせているのを知ってか知らずか、京吾は淡々と続けた。

「そしてその金額が、千万単位……下手をするともう一つ、桁が繰り上がる位になっている。それで困っている」

「——!？」

聞いたとたん、幸人は血の気が引くのを感じた。億に近い借金、ということだ。それだけの金を、義兄は京吾から借りている。

「も、も、申し訳ございません！ 必ず返します！ でもどうして、義兄がそんな……」

蒼白になりながら、懸命にそう言うと、京吾は再び肩を竦めた。小脇に抱えた革のケースから、透明な書類フォルダを一つ、取り出す。

「とりあえずこれを見てもらおうかな。彼が俺との間に交わした借用書だ。俺が個人で融資してやったものだが、一応、うちと契約している弁護士の立ち会いの下で行っている。何なら確認してもらってもいい」

幸人は震える手でその何枚かの書類を取り上げ、目を走らせた。間違いない。義兄の字でサインされている。日付を見て驚いた。義兄は、義父が亡くなりその会社を継いだ直後、それに一年ほど前、経営状態が一度、悪化した筈の頃に、かなり大きな金額を彼に融資してもらっている。一年前に悪化した際には長いつきあいだった業者たちまでもが手を引き、何も聞かされていなかった学生の幸人や、義母にも状況が良くないことがはっきり伝わり、倒産する覚悟を決めたほど危険な状態だった。だが何故かその時、にわか倒産は免れたと聞かされ、経営状態もいきなり回復したのだ。幸人はそれがずっと不審で随分問いただしたのだが、義兄は理由を決して話そうとはしなかった。もしか、それは彼が……。

「君の兄貴は随分とまずいところでも借金していたようだな。調査したところすぐにわかったので、その連中が君にまで危害を加えるのじゃないかと思った。それで君に会いに行ったら留守だったのでこちらかと思つて来た。君はよくこの時間に、義母上を見舞つていてということは兄貴から聞いていたからな」

「それは……ありがとうございます。でも、それじゃ……」

自分のことを心配してくれたのか、と感謝して丁寧に頭を下げ、それからすぐに気になることを尋ねた。

「それじゃ、この金額からして、義兄さんの会社が一年前に何とか助かったのは、新城さんのおかげだったのですか……!? 日付を見たら、他にも何度か細かく融資を受けているみたいですけど、それって殆ど、経営がまずかった時ですよね……?」

「そういうことだ」

幸人の言葉に、京吾は微かに目を見張り、それからまた肩を竦めて頷いた。

「で、でも……どうして」

「何だ？」

「またも見つめられ、おろおろしながら、幸人は懸命に続けた。」

「あの……だったら何故、義兄にそこまでしてくださったのですか。正直なところ、義兄が経営するようになってから、会社が上手くいってない、それに回復する見込みもない、ということは、貴方にはわかっていたはずですよ。なのに……」

会社が義兄のおかげでとんでもないことになった、とはっきりと幸人が知ったのは、義兄が失踪する直前だった。幸人はそれ以前から不安を感じていたのだが、義兄にそのことを問いただすとひどく怒り、殴られてしまったことがあった。社員や出入りの業者に聞こうとしても、皆怯えたように口をつぐんで

いた。幸人も怖くて、それ以上は追求できなかったのだ。

だが、そんな状態だった義兄に、有能な経営者であるはずの彼が、こんな大金を簡単に融資するだろうか。友人だから、という理由でそんなことをするとは、あまり……。

「俺が兄貴に、あっさり金を貸すような人間には見えない、か。やはり、賢いな」

京吾に見透かすように笑って言われ、真っ赤になる。と、京吾は軽く手を振って続けた。

「さて、君にはもう少し話したいことがあるが、とりあえず見舞いに行くか。義母上をこれ以上待たせない方がいいだろう？」

「は、はい……。あの、どうかこのことは義母には内緒にしておいていただけますか。本当に申し訳ないのですが……」

「ああ、勿論だ」

京吾は何故かその時、また唇を歪め、笑った。

※続きは製品版でお楽しみ下さい

愛欲と被虐の調教

《立読み版》

発行日 2011年5月20日

著者名 早瀬 響子

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK・CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。